様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23　年　5 月 9　日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007　～2010
課題番号：19520212
研究課題名（和文）英詩における形式と内容―ラーキンとその関連詩人を中心に

研究課題名（英文）Form and Content in English Poetry―Larkin and Other Poets Related to Him

研究代表者
宮内　弘　（MIYAUCHI HIROMU）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：90047407

研究成果の概要（和文）：ラーキンを中心に、イェイツ、ハーディ、ヒーニー， テッド・ヒューズなどの詩作品に見られる形式、すなわち押韻形式、韻律、統語法などを分析し、これらの詩人が使用した形式が、彼らの個々の詩の内容を反映していることを実証した。次にこの研究をふまえて、上述の詩人の作品の際だった特質であると考えられる「重ね合わせ」と「埋め込み」の技法を、特に形式と内容との関係に注意を払いながら、考察した。

研究成果の概要（英文）：I have analyzed poetic forms such as rhyme schemes, meter and syntax in the work of Larkin and other poets (Yeats, Hardy, Heaney and Ted Hughes) and have proved that the forms these poets employed reflect the content of their individual work. On the basis of this study, I have also investigated the poetic techniques of ‘superimposition’ and ‘embedding’ which are predominant features in their work, paying special attention to the relationship between form and content.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：英米文学、英詩、韻律、形式、押韻、文体

１．研究開始当初の背景

私は主としてイェイツやラーキン、Ｔ．Ｓ．エリオット、ディラン・トマスなどのイギリス現代詩を、言葉や文体に焦点を合わせて研究してきた。具体的にはことばの多義性や詩人の文体の特性などに注目しながら、テクストの精読を通じて、作品を解釈しようと試みてきた。また従来の批評とは異なる文体論的視点を持ち込むことによって、これまで見過ごされてきたテクストの内部構造の一端を明らかにしようとした。その際、機械的な文体分析を避け、作品を取り巻く外部要因にも充分留意した上で、より広い視野に立って、解釈を試みた。このような過程で、詩の作品の形式と内容との微妙で密接な関係に興味を抱くようになった。そこでこれまでの文体論的研究で培った、方法論や成果を生かして、ラーキンや彼に影響を与えた詩人たちの作品の内容と形式の深い関係を考察しようと思うようになった。

２．研究の目的

（１）ラーキンの詩作品において、音声、単語、統語法、韻律、脚韻などさまざまなレベルの形式を分析しながら、内容と形式の関係を明らかにすることを目指す。とりわけ、ラーキンは彼独自の押韻形式を産みだそうとしていたので、その押韻形式と作品の内容との関係を重点的に考察する。

（２）さらにラーキン研究で得られた成果を発展させて、より一般的に英詩における形式と内容との関係を追究する。そのために、ラーキンに大きな影響を与え、現代詩の流れの中で、ラーキンを含めて一つの強力な系譜を形成した、ハーディ、イェイツの作品や、ラーキンと並んで現代詩の代表的詩人であるヒーニーやテッド・ヒューズの作品、あるいはラーキンをはじめ、多くの詩人の想像力をかき立て、詩の技法の宝庫であった、シェイクスピアの『ソネット集』などを対象として、さまざまな二重性に着目しながら、形式と内容との関係を究明していく。換言すれば、これら個々の詩人が形式と内容を一致させるために、どのような手法を用いているかを、テクストに即しながら、具体的に検証したのち、彼らに共通した英詩における形式と内容を結びつける技法の原理を探る。

３．研究の方法

（１）ラーキンが永年館長を務めた、イギリスのハル大学図書館やその中にあるラーキン資料室の草稿をはじめ、彼に関するさまざまな資料を調査した。彼は推敲を重ねる詩人なので、草稿から完成稿に至るまでの過程を調べることによって、彼の文体の特質や技法を知ることができる。またラーキンに大きな影響を与えたイェイツも多くの草稿を残しているので、両者の草稿を比較することによってそれぞれの形式の特色を明らかにしていく。

（２）ラーキンの詩を調べていくと、彼が韻に対してなみなみならぬこだわりを持っているのがわかる。彼は詩の内容に応じて、独自に産み出したさまざまな押韻形式を駆使したり、完全韻、不完全韻を巧みに使い分けたり、詩の意味を押韻の形態で示唆することによって、驚くべき詩的効果を上げている。このように、韻と詩の内容やテーマとの相関関係を、できるだけ多くの作品に見いだしていく。

（３）上のラーキン研究をさらに発展させて、ラーキンと関係の深い詩人の作品を選んで、その手法を分析し、形式と内容に関する、より一般的な原理を引き出す。

ところでラーキンの詩作品において、二重構造が顕著であることは注目に値する。具体的にいえば、一つの詩において、あるテーマ、思想、感情、ムードの下層部に、それと相反する対立的要素が密かに示唆されていることが多い。こうして詩の重層化がはかられるのである。また一方、内容の重層化に対応するかのように、形式、技法においても、さまざまなレベルで重層化が見られる。ただし、このような重層化はラーキンだけに見られるものではなく、他の詩人にも当てはまる。そこで特にラーキンが強い影響を受けた、ハーディ、イェイツの詩作品やラーキンが愛読したと思われるシェイクスピアのソネット、ラーキンと並ぶ現代英詩の代表的詩人であるヒーニーの詩作品における重層化を考察する。

４．研究成果

（１）イギリスのハル大学図書館とその内部にあるラーキン資料室を訪れ、そこにあるラーキン関係の資料、草稿を調査した。とりわけ草稿から完成稿に至る過程を調べることによって、彼が韻に対して並々ならぬこだわりを持っていることがわかった。そこで押韻形式とそれぞれの詩の内容との関係に焦点を合わせて研究を進めた。押韻形式に関しては、これまで他の詩人に用いられたことがなかった、全く新しい型を使って独特の効果を出しているのがわかった。例えば、ふつう押韻形式はスタンザを基本単位として形成されるが、ラーキンはスタンザを跨いだ、彼固有の波長の長い押韻形式を用いることがある。比較的長い「海辺へ」という詩では、押韻形式はそのスタンザでは完結せず、次のスタンザに次々と繰り越されていくため、海の波のリズムを想起させる。また押韻だけでなく、文も当該のスタンザでは完結せず、次のスタンザに繰り越されている。これもやはり、海の波のリズムを形成するのに大きな役割を演じている。また「覚えている、覚えているとも」という詩では、スタンザは５行から成っているため、本来ならば押韻形式も５行で完結するはずであるが、実際は９行から成っている（abc cba abc)。この形式は意識の流れを、あるいは記憶が、連想を伴うかのように、次々とつながっていくさまを反映しているように見える。さらに押韻形式をよく見てみると、２番目の(cba)は、最初の(abc)を裏返しにしたミラーイメージであることに気づく。同様に、３番目の(abc)は２番目の(cba)のミラーイメージになっている。これはまさにステレオタイプのロマンティックな子供時代のイメージを裏返しにした、話者の子供時代の記憶やイメージが、次々と鎖状につながって、この詩の大きな枠組みを形成していることを表している。また「悲しき足取り」の詩の中で用いられている押韻形式は、(aba bba cdc ddc efe ffe)であるが、この形式は単位をなす二連ごとに休止があ

るために、terza rima のようにスムーズに前に進めない。まさにこの押韻のステップがタイトルの「悲しき足取り」を具現化しているのである。

また、他の詩において、ラーキンは恋人同士の不信感や感情の行き違い、カップルの不釣り合いな関係を示唆するときには、不完全韻を、二人の共感を示唆するときには完全韻を用いている。あるいは変化のない惨めな日常生活を描写する詩では、単調な押韻形式を用いている。さらには正反対の意味を持つ単語や、不協和音を響かせる単語を互いに押韻させることで、アイロニカルなトーンを示唆することも珍しくない。例えば、ラーキンらしい、屈折した恋愛詩「若き頃の放蕩」では、三対の不完全韻は話者と美人とのミスマッチな関係を、一対の完全韻は話者と美人でない方のマッチした関係をそれぞれ示唆している。

（２）ラーキンは、韻律に関しては、例えば「お次の方、どうぞ」では、五歩格から急に二歩格に変化させることによって、詩の転機や新たな展開を、非常に効果的に表現している。そのほか、口語、俗語の多用やシンタクスのねじれなどを、詩の内容と密接に絡ませていることを忘れてはならない。

（３）次にラーキンに大きな影響を与えたイェイツやハーディにおける形式と内容との密接な関係を具体的なテクスト分析に基づいて考察した。彼らとラーキンは詩の形式を重視する詩人であり、とりわけ、韻、韻律、音声などに細心の注意を払っている。彼らに共通していることは、ただ単に伝統的な形式をそのまま踏襲するのではなく、詩の内容に適合させて、これまでにない新しい形式を産み出そうと努力している点である。まずイェイツは詩の内容に応じて、多岐にわたる押韻形式（例えば、「同韻」とその変形、均整のとれた幾何学的パターンの韻、サンドイッチ型韻、不規則型韻）を駆使し、さまざまな文学的効果を上げている。またハーディにおいては、詩の意味や、気分の変化に応じて、韻律や押韻形式を変え、形式と内容との一致をはかっている点が目立つ。また男性韻と女性韻との巧みな使用も内容と形式の一致に大きな役割を果たしている。例えば、『声』という詩では、男性韻と女性韻とを交互に用いて、男女の会話を韻によって表現しようとしたり、語尾が弱まる女性韻を巧みに使用することによって、亡霊となって消えゆくこだまの音を効果的に示唆したりしている。

（４）ラーキンとその関連詩人であるハーディ、ヒーニー、テッド・ヒューズ、シェイクスピア、スペンサー（ラーキンはルネッサンス期の詩人を愛読したと推察される）などの作品における、形式と内容との関係を、ラーキンの特質の一つである二重性に帰着する「重ね合わせ」の技法に焦点を合わせて考察した。具体的には「重ね合わせ」を、１）月蝕のように「重ね合わせ」そのものが主題とされるもの、２）掛詞のようなキーワードを介して、「重ね合わせ」が仕組まれたもの（スペンサーの鹿狩りを扱ったソネットでは”deer”が　”dear”を連想させて、鹿狩りと恋愛が重ねられている）、３）時間的、歴史的に隔たった出来事が重ね合わされたもの（ヒーニーの「罰」では北欧における先史時代の見せしめと現代の北アイルランドの見せしめが重ねられている）、４）絵画、音楽など他のジャンルの作品が重ねられたもの（ヒューズの「睡蓮を描くこと」という詩ではモネの「睡蓮」が重ねられている）の４つのパターンに分類して、この手法が個々の詩作品の中でどのように機能し、内容やテーマとどのように関わっているかを論証した。さらに「重ね合わせ」の一種である「埋め込み」の技法をシェイクスピアやラーキンの作品の中で例示し、埋め込まれた単語が詩のテーマと深く関わり合っていることを示した。例えばラーキンの「刈り取られた草」では”frail”の中に“ail”が、“builded”の中に”dead”が埋め込まれていて、詩のテーマである生のはかなさが強く示唆されている。

（５）次にラーキンのロマンティック詩の範疇に属する詩を取り上げて、詩の内容やテーマを反映した形式が用いられていることを実証した。例えば、ラーキンの代表的な初期の恋愛詩では過去の事象を凍結して、変化せぬものに変え、それを額縁に入れて永遠に保存するというモチーフが、額縁型の押韻形式を用いることによって、具現化されている。また「１９１４年」という詩は、第一次世界大戦以前のイギリスの古き良き時代を、主動詞のない一つの名詞文を使用することによって、より効果的に、額縁の中に凍結し、保存しようとしたものである。同様に、「海辺へ」という詩では、海辺の世界が、絵画のように、名詞構文によって、凍結、保存されている。このような内容と形式の一致こそがラーキン詩の顕著な特質なのである。このほか、彼のロマンティック詩ではさまざまなレベルにおいて、脱ロマンティシズム化がはかられていることを、具体例を交えながら例証した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

1) 宮内　弘　「ラーキンのロマンティック詩における形式」『京都大学文学部研究紀要』第 50 号、2011 年、査読無、pp.43-80.

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/ds
2) 宮内　弘　「英米詩における形式と内容―『重ね合わせ』と『埋め込み』の手法」『京都大学文学部研究紀要』第 49 号、2010 年、査読無 pp.73-99.
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/ds
3) 宮内　弘　「イェイツ、ハーディ、ラーキンにおける形式と内容」『京都大学文学部研究紀要』第 48 号 2009 年、査読無 pp. 1-32.
http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/ds

６．研究組織

(1)研究代表者

宮内　弘（MIYAUCHI HIROMU）
京都大学大学院文学研究科・教授
研究者番号：90047407

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：